世田谷村日記

石山修武

八月二三日

昨日中間講評会。当り前の事だが百名全部に対面した。来春の佐賀ワークショップは講評会を全公開にしよう。三年間やってみて色々な事がわかった。この経験は直接的で具体的なものだ。何らかの形で生かす。大学が抱え込んでいる問題そして地域の問題。それを体で実感できたわけだが持続してゆく事の困難さも又、痛感している。佐賀の八頭司さんが県の小さな仕事を頼まれていて、何とか上手くやってもらいたい。社会人の学生が佐賀に建築を作れば、それは考えてみればW・Bの成果という事になるからだ。それで良い。が、しかし、一人で考えなければならない事が多い。

エネルギーの最大効率を考えるべ時だろう、エネルギーは無限ではない。

第一講、若松裕之ＩＴと生活　第二講隅研吾

初めて隅研吾のレクチャーを聴いた。この人の特色は深く問題に没入しないという本格的な特色を持つことであることが解った。どんな風にでも移り変ってゆくことができるという逆説的に本格的な資質を持っているのだ。

午後、ベルリンから来たヨルク・グライターと楽しいおしゃべり。夕方、渡辺豊和来校。６時より森川嘉一郎のレクチャーを三人でプレ・ビューしてもらう。磯崎さんから、すでに聴いていた秋葉原、渋谷そしてガレージキット論。すでに起きている事象を異常な精密さで解釈しようとする変テコリンな情熱の形。二年位後に彼は初めてのクラッシュを迎えるだろう。彼の研究は最初から、良く生きることの不可能性を証明しようとしているものだからだ。モダーンデザインがただ単に良い趣味という階層に属しているものに過ぎないことを特異な場所に現われている特異な現象への直観をベースに説明しようとしている。

夜、グライター、豊和という異様な組合せで食事。今日は疲れていながら面白かった。ニーチェ・テーマパーク・モダナイゼーションというグライターの研究のテーマ設定の意味がようやく少しわかった。

八月二四日

第一講ヨルク・グライター　ベルリンに出現したピラミッドすなわちカイロの街並みから始まり、ヨーロッパの博覧会の歴史を介してテーマパークの出現の意味を説いた。近代とは何か近代化とは何かが主題だ。ニーチェの永劫回帰と近代化の特にその技術の直線的進歩の矛盾に触れ、テーマパーク的表われは技術の直線的進化を修正、鈍化させようとする歴史的必然であるとする考えだ。必然と言うのが誤解を招く言葉ならば歴史的自然とでも言おうか。

第二講　渡辺豊和　空間の病理

この建築家の自説を曲げぬ事の持続には信頼のおけるものがある。しかし、豊和さんの曲げぬ自説をいくらかアナクロに見せてしまう程に時代の、資本主義市場の原理は強いのだ。レクチャーの最後に彼が彼の子供に言ったという、子供といったってもう京大を出て建築家になろうとしているのだが、「お前、俺と同じことはするなよ、頭を使うより、肉体を使う建築家になれ」というのは実に良かった。豊和の説く論理の全体はあやしいものだが、時に溢れ出るインスピレーションの輝きはおとろえを知らない。

午後、唐津の子供もの作り教室へ、唐津の子供たちに話をする。広島の造形作家木本一之さんが唐津まで来ていて、話をした。今回のワークショップでの良い出来事の一つであるかも知れない。

夜、高木正三郎のミニレクチャー。ゆっくり育ってくれれば良い。この人はゆっくりと言うのが実に大事だ。ウサギは皆走り疲れて、バタバタと倒れるのだ。倒れぬウサギは本当に走り抜くのだから、これは高木正三郎の敵うものではない。四十才で頭角を現わし、五〇才でいぶし銀のように光る。これが彼の理想的なプログラムだろうな。

八月二五日

休み。今日は午後三時に子供のＩＴ教室の修了式に出て、佐賀の子供たちに「御苦労さん」を言ってあげよう。

本当は子供たちこそ、新しい形の教室が必要なのだろうが、私にはそれに本格的に対応する力も才質も残されてはいない。今はこれ位で限界なのだ。マイノリティーの最大勢力は子供である。誰か、これをネットワーク化する構想を作ればよいのに。

家作りの主体に子供の遊びを取り入れられれば、凄いことになるのだが、杉並の渡辺さんに提案してみようかな。

星の子愛児園の鉄骨現寸検査が八月三一日で、これはどうにも行けない。松本に任せるしかない。図面が送られてきたので、今日チェックしよう。